

傷を負っているとは。断章を集めた小さな本なのに、なんとという膨大、充実した積載量。それを可能にしているのは、ひとえに断章と

いう形式にあるのだろう。丸山にあって自分
にないものが、これほどわかる本はない。と
きおり散見されるドイツ語が、苔庭のなか飛
び石を踏ませてもらえるみたいで、ありがた
かった（これは『全書簡』を覗いたときにも
感じたことだが）。ドイツ語初級文法を長年
教えてきた身への、せめてものクリスマス・
プレゼントか。

5 菅原和孝編『フィールドワークへの挑
戦』世界思想社、二〇〇六年

こんなに面白い本は近年まれ。文化人類学
の授業で学生たちに課されたレポートを、こ
のようなかたちにまとめられた先生、菅原和
孝氏には、まことにシャッポを脱ぎます。
「おみくじ」に付されている和歌の研究にお
もむいた学生のレポートは、探偵小説よりお
もしろかったし、摂食障害者たちの自助グル
ープを探訪したレポートには、集会最後に全
員で唱えられた祈りが収録されている。「神
さま、私にお与えください。自分に変えられ
ないものを受け入れる落ちつきを、変えられ
るものは変えてゆく勇気を。そして、ふたつ
のものを味わえるかしこさを」。これには唖
らされた。また、鳥葬のことを書いている
その意識を絶対的なものにつらぬかれている

女性の、「黒い」、ないし、「暗い感受性」が
記憶に残る。

斎藤成也
(人類学)

1 塩田光善『石斧と十字架——パプアニュー
ギニア・インボンク年代記』彩流社、二〇
〇六。

著者が二十代に経験した首都ポートモレス
ビーから始まるパプアニューギニア高地人との
出会いと、彼らが文明と出会ってどうなっ
たかの、ミクロ現代史。ロシア人ミクルホ・
マクライの『ニューギニア紀行』に匹敵する
おもしろさ。文化人類学はやはり未開社会に
光を当ててこそ光るのだ。続編を読みたくな
る。

2 佐々木閑『犀の角たち』大蔵出版、二〇
〇六。

大乘仏教の多様化の原点を律の視点から解
き明かして、世界の仏教に新しい風を吹き
込んだ著者が、数学、物理学、生物学（特に
進化論）に関する深い造詣のもとに「科学の
人間化」を示し、そこから仏教思想を語る。
タイトルは原始仏教の「スッタ・ニパータ」
に頻出する言葉から。

3 ユン・チアンとジョン・ハリデイ著、土
屋京子訳『マオ』上・下、講談社、二〇〇五。
『ワイルドスワン』の作者と英国人の夫の

ン・エステイ（讀えられよ）山川偉也訳、
人文書院、二〇〇六年一〇月。

2 アーザル・ナフィーシー『テヘランでロ
リータを読む』市川恵里訳、白水社、二〇〇
六年九月。

3 ラッセル・フォスター、レオン・クライ
ツマン『生物時計はなぜリズムを刻むのか』
本間徳子訳、日経BP社、二〇〇六年一月。

4 テンプル・グランディン『動物感覚』中
尾ゆかり訳、NHK出版、二〇〇六年五月。

5 米原万里『打ちのめされるようになすこ
い本』文藝春秋、二〇〇六年二月。

1 二〇世紀ギリシャ詩人、ノーベル賞受賞
者エリテイスの長詩『アクシオン・エステ
イ』の全訳である。ギリシャの自然とその歴
史、文学、ギリシャ正教世界、そして自身の
第二次大戦従軍体験を踏まえた困難な時代に
おけるギリシャ讃歌である。長詩を日本語に
訳すること自体が困難な事業だが、本年の訳
詩世界の最大の収穫に数えられよう。私など
がいうのはおこがましい限りだが、いずれも
原文をみて「こうしか訳しようがなら」と思
われるところが多く、しかも日本語の詩にな
っている。美しい対訳本を刊行された訳者と
出版社に敬意を表する。神戸の代表的書店に
平積みになっていたのをみてほっとした。

2 英文学を宗教指導者専制下で読む女子学
生たちが『ロリータ』を男の夢を押しつけら

れた女性の眼で読むという一事だけでも開眼
的体験であった。似た時代は私の幼い時にも
あった。その青年たちに亡命という選択肢は
なかったが。

3 ごく最近の生物時計についての発見にも
とづく時間生物学の展望、4 は自身が高知能
自閉症という女性生物学者からみた、ヒトが
参入したい動物の感覚世界である。臨床の
義務を持たなくなつて生物学の本を楽しんで
いる。その中の二冊。

5 同時通訳者という存在に早くから関心を
持つて、事あるごとに本人たちをつかまえて
尋ねていたが、米原さんの本からは他の人か
らは得られなかった体験をずいぶん教えてい
ただいた。遺著で表題は著者らしくない直球
すぎると思うが、これを最後として彼女の文
章に接することがないかもしれないと思い、
その早すぎる逝去を改めて悲しみ惜しむ。

大井 玄
(社会医学)

1 Rajiv Chandrasekaran, *Imperial Life
in the Emerald City: Inside Iraq's Green
Zone*, Knopf 2006

イラクでアメリカ軍は「日本におけるよう
に」歓呼をもって迎えられはるはずだった。し
かし二〇〇六年秋の調査では、イラク人の三
人に二人は占領軍を殺すことに賛成している。

共著。毛沢東の残虐性をあばきつつも、蔣介
石よりも優れている点を冷静に筆致。一部の
記述に疑点を指摘する声もあるが、少なくとも
も文化大革命時代に関する部分は類書と一致
する。「造反有理」として旧来の伝統を破壊
した毛は、やはり革命家として偉大である。

4 佐藤優『自壊する帝国』新潮社、二〇〇
六。

存在意義が薄いとよく言われる日本の外務
省だが、なかには立派な仕事をする人々がい
ることが本書でわかる。政治における思想と
歴史の必要性を感じた。『The Way of a
Pilgrim』でかいま見ることができたロシア
正教の持つ神秘主義が、今日でも息づいてい
ることが、サーシャとその周辺の人々からか
いま見える。

5 村上もとか『龍』一〜四二巻、講談社、
一九九一〜二〇〇六。

京都に発して上海や満州を縦横し、今年完
結したこのコミック大作からは、剣道・祇
園・映画・財閥など日本の近代や、魯迅・秘
密結社・京劇・馬賊といった中国の近代につ
いてたくさんのお話を学んだ。最後が龍の国
で終わるのもいい。

中井久夫
(精神医学)

1 オデュッセアス・エリテイス『アクシオ
ン

今やイラク人の大半は叛徒である。人心の離
反を招いた占領政策は、根本においてはアメ
リカ人が異文化を理解していないことに帰着
する。パース党とイラク軍を解体し、失業率
四〇パーセントの社会に逆流させる。国営企
業を「全て」民営化し市場原理を通じて効率
化しようとする。著者が行ったイラク人から
の直接取材は、日本のジャーナリズムにとっ
てい期待できない。

2 Jared Diamond, *Collapse: How Soci-
eties Choose to Fail or Succeed*, Viking
2005

社会はその環境でどうすれば永続的に存続
できるか。著者は社会の崩壊原因として人間
が及ぼす環境破壊、気候条件変化、敵対的隣
人の有無、など五種のカテゴリーを考えてい
る。なかでも中央政府の長期展望に基づく強
制的指導が必要である例として徳川時代の日
本が挙げられている。私利私欲による気候は
「環境」が許さない。現在、閉鎖系としての
地球にはかつての幕府のような強力な指導力
は存在せず、経済競争を重視する趨勢を抑制
できない。本書は地理温暖化がこのまま不可
逆的な状態にまで進行することを示唆する。

3 井上勲『藻類三十億年の自然史——藻類
からみる生物進化』東海大学出版会、二〇〇
六年
地質時間というならば一瞬の間にヒト科ヒ